

33 “ツルを守り、地域を守る” ツルの里再生に向けた地域農業の展開

しゅうなん
【山口県・周南市】

- ツルとの共生を目指して環境に配慮した基盤整備を行うとともに、持続可能な営農に向けて法人を設立。
- 本州唯一のツル渡来地である他にない資源を活かし、地域全体で環境を保全し、高付加価値型農業を追求。
- 特別栽培米のブランド化や酒造会社との契約栽培、ICT導入等により、地域農業の発展に向けた取組を推進。

地区の特徴

中間地域

水稻

キーワード

高収益作物

6次産業化

集積・集約化

法人化

取組前

未整備の生産基盤

やしろ
八代地区

【農家数】263戸
【経営規模】0.9ha/戸
16a/区画
【作物】水稻

- 狭小・不整形なほ場、用排水路、農道も未整備であり、荒廃農地も拡大



本州唯一のナベツル渡来地

- 江戸時代からナベツルを保護してきた歴史
- 「八代のツル及びその渡来地」として国の特別天然記念物に指定
- ツルの渡来数は年々減少傾向

取組内容

区画整理、用排水路の整備

ほ場整備事業（H4～13）
経営体育成基盤整備事業（H12～19）



整備前

整備後

ツルのねぐら整備

ふるさと水と土ふれあい事業（H9～12）

法人化

農地・農業水利施設等の維持管理

多面的機能支払交付金（H19～）

ICT農業の導入

取組後

ツルと共生した地域農業の発展

農事組合法人 ファームつるの里

【営農規模】38ha（H28）（最大0.5ha/区画）
【組合員数】62人（H28）
【作物】主食用米20.9ha、酒米2.4ha、麦・大豆
二毛作6.4ha、野菜等0.3ha（H28）
【雇用】常時6名（うち20,30代：3名）
臨時7名（H27）
【売上】35,127千円（H27）

【高付加価値化】

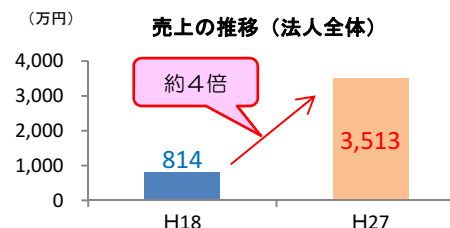
○ ツルの生態に配慮した営農（冬期湛水、無農薬無化学肥料）に取り組み、ブランド米「つるの里米（商標登録）」として販売

【企業連携】

○ 地元酒造会社と連携し、酒米の契約栽培を行い日本酒「かほり鶴」を製造

【ICT農業】

○ 栽培技術確立による酒米の生産拡大と法人の所得向上を目指し、ICTを活用した取組を推進



つるの里米

◆ 誰がどのように・・・？

土地改良区の理事長が中心となり、地域での学習会や集落座談会による話し合いを進めました。

反対する農家もいましたが、整備しなければ水田が荒れ、ツルが来なくなる、という結論に至り、合意形成を図りました。



きっかけ

古くからナベツルの越冬地だったが、餌場となるほ場が荒廃し、ナベツルが減少

Step 1 (H4～19)

基盤整備の実施

- 地域一体が国の特別天然記念物であることから文化庁と整備方法を協議
- 大区画化を図るとともに、ツルの生態に配慮した整備を実施

Step 2 (H18)

法人化

- ほ場整備を契機に、地域の農業を支え、ツルにも優しい環境保全型農業を推進していくため、農事組合法人「ファームつるの里」を設立

Step 3 (H19～)

環境保全型農業

- 兵庫県豊岡市のコウノトリを育む農法を参考に冬期湛水を行い、無農薬無化学肥料による栽培を実施
- 生産された米は、「つるの里米」として商標登録し、ブランド化

ツルが飛来する冬期間は、地元農家もほ場には立ち入れません。地区の工事も全て休止します。

◆ ツルの生息環境を守るために・・・

ツルの餌場となる一部の水田(給餌田)は、ドジョウ等の生息環境に配慮し、湿田化しました。さらに、生態系保全型水路に加え、ツルのねぐらも整備しました。



◆ 法人の収益力向上に向けて・・・

ツルを保護するため、冬季の営農は行えないことから、水稻での収益力を向上させることが必要です。そのため、需要のある良質な酒米の生産拡大に向けた栽培技術の確立を目指し、ICTを導入しました。

地元小学生も水路の生き物調査や観察記録をまとめた新聞「つるの日記」を発行するなど、つるの保全活動に関わっています



法人事務局長が知人を介して、酒造会社社長と知り合い、酒米の生産がスタートしました。

Step 4 (H19～)

多面的機能支払

- 土地改良区を中心に、農事組合法人やツル保護団体等が会員となり「つるの郷を守る会」を設立
- 農地や水路の維持管理のほか、地域住民と共につるのねぐらを整備

将来に向けて

- ☑ 若者を中心に研修生を受け入れながら後継者の育成を進め、地域農業全体の生産体制を強化
- ☑ ICT活用による酒米生産支援システムを確立
- ☑ 園芸作物等の生産を進め、複合経営での6次産業化を推進

今後の展望

Step 6 (H27～)

ICT農業

- 県や研究機関との連携の下、水田へのセンサーやカメラを設置するなどし、栽培技術等を“見える化”
- スマートフォンを活用した遠隔操作により水管理の省力化を実現

Step 5 (H22～)

地元企業との連携

- 酒造会社と連携して酒米を契約栽培し、日本酒「つるの里米 かほり鶴」を製造



地域資源保全

美しい農村

再エネ等

水利施設整備

防災・減災力